

特集

水と暮らす九州 —全国大会2025 in 熊本—

Living with Water in Kyushu
—Japan society of civil engineers 2025 annual meeting in Kumamoto—

特集担当主査：石橋知也

西部支部学会誌編集部会委員：伊豫岡宏樹、田中尚人、羽野暁、松永昭吾、山本礼子

熊本での全国大会の開催

土木学会は2018年に「22世紀の国づくり—ありたい姿と未来へのタスクー」をテーマとした「デザインコンペ」を実施した。⁽¹⁾同コンペでは、風景デザイン研究会による「『想像の共同体』から『実感の共同体』へ」が最優秀賞を獲得している。そこでは、九州が自然条件的に明快なまどまりを有していることを前提に、流域を単位とした暮らし方の提案がなされている(図1)。

さて、2025年9月「気候変動時代の土木イノベーション—カーボンニュートラルとレジリエンスで創る持続可能な社会」をテーマとして、

あたり特筆すべきことがある。それ

土木学会全国大会が九州・熊本で開催された。本特集はこれと連動しつつ、前述の作品で描かれた九州の特性を重ね、「水と暮らす九州」と題した。九州における特徴的な事象を取り上げながら持続可能な社会の構築に向けた議論を開く。カーボンニュートラルは気候変動の抑制を目指す技術的・思想的アプローチであり、レジリエンスは気候変動に起因する災害や社会的課題への対応力を高める方策として位置付けられる。両者を「気候変動を前提とした社会構造の再構築」という枠組みで捉え、両者の補完的かつ不可分な関係性を

ABSTRACT

In September 2025, the Japan Society of Civil Engineers Annual Meeting took place in Kumamoto, Kyushu, under the theme "Civil Engineering Innovation in the Era of Climate Change: Creating a Sustainable Society through Carbon Neutrality and Resilience." This special feature, titled "Living with Water in Kyushu," is closely aligned with the convention and examines the region's distinctive water-related characteristics, while contributing to broader discussions on sustainable societal development. Although carbon neutrality and resilience may initially appear as separate ideas, the former functions as a technical and conceptual approach to mitigating climate change, while the latter focuses on strengthening society's capacity to cope with disasters and other challenges intensified by climate impacts. When viewed within the shared framework of "reconstructing social systems in anticipation of climate change," the two concepts become closely linked and mutually reinforcing. Using selected areas in Kyushu as case studies, this feature explores the connection between carbon neutrality and resilience from various perspectives, including civil engineering innovation, water resource management, water-related disasters, infrastructure, and everyday life.

は、本特集の土木学会誌への掲載時期についてである。2025年4月頃から特集企画が立ちあがり始め

て、記事にかかる取材や執筆が同年8月から10月にかけて実施された。つまり、前述した全国大会の準

備から実施に至る過程と本特集にかかる作業の過程が時間的にはほぼ重なっている。この試みの結果として、全国大会での議論の熱量や臨場感をしっかりとお届けできれば幸甚である。

本特集の構成

本特集は全部で七つの記事で構成される。

冒頭の鼎談では、全国大会の基調講演会・特別講演会・全体討論会を見据え、持続可能な社会に向けた土木イノベーションや自然と共生する土木、地域と協働するアートなどを切り口に議論が展開された。次に、熊本市の下水道事業による水と食がつなぐ地域循環の取り組みを紹介した。三つ目の記事では、私たちの生活に欠かすことのできない水をたどり見えてくる土木の仕事を、九州の土木遺産を巡る旅としてご紹介いただいた。後述する対談や鼎談につながる布石となっている。

四つ目の記事（対談）では、近年の水害、渇水対策、水道関連インフラの老朽化などが求められる水道事業

の挑戦について自治体担当職員による意見交換を掲載している。五つ目の記事では、小水力発電の地域事業化を巡る工夫の数々からみえてくる新しい社会づくりの在り方が示唆されている。六つ目の記事（対談）では、気候変動による災害リスクの増大や人口減少に伴う地域再編に向け合い、自然の力を生かした持続的な地域づくりを進めることについてグリーンインフラの観点から議論いた

だいた。最後の鼎談では、九州に多く存在する石橋に焦点を当て、土木の伝統的技術とその持続性について、さらには哲学や教育に至るまで熱く語つていただいた。

以上のように本特集では、九州における具体的な地域を舞台とし、土木イノベーション、水資源の利用と制御、水災害とインフラ、暮らしと営みなどといった観点から、カーボンニュートラルとレジリエンスの関係性を多角的に探究していく。

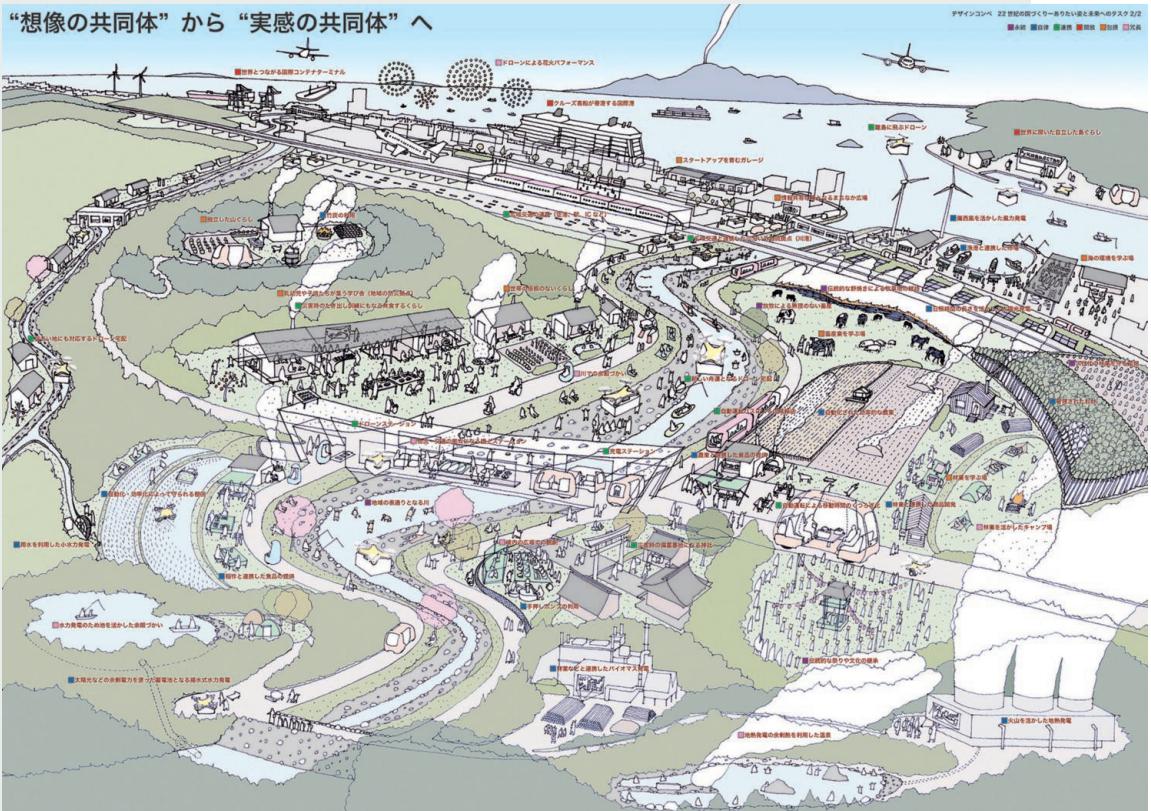


図1 「想像の共同体」から「実感の共同体」への提案イメージ図（作：増山晃太）

参考文献
(1) 土木学会:土木学会デザインコンペ22世紀の国づくり—ありたい姿と未来へのタスクー、2019年 <https://www.jisce.or.jp/committee/jisce-22kunizukuri/conpe.html>